

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 宮嶋俊一

宮嶋俊一氏の『ハイラーの宗教理論』は、二十世紀前半から中葉の宗教学の主潮流であったいわゆる宗教現象学派の重鎮、フリードリッヒ・ハイラー (Friedrich Heiler: 1882-1967) の宗教理論を、二つの主著『祈り (*Das Gebet*)』(1918)と『宗教の現象形態と本質 (*Erscheinungsformen und Wesen der Religion*)』(1961)を中心に詳細に読解、検討し、今日的視点からの再評価を試みたものである。ハイラーは、その名声にもかかわらず、欧米においてもこれまで本格的研究の対象とされることがほとんどなく、本論文はモノグラフ的ハイラー研究としても貴重である。宮嶋氏は、ハイラーが戦時を除き一貫して所属していたマールブルク大学に三年間にわたって留学し、当地におけるハイラー的宗教学の学統に親炙するとともに、収集したさまざまな二次文献も活用して本論文を仕上げている。

ハイラーらの宗教現象学派の業績は、そこで標榜される宗教現象記述の客観性、神学的価値判断からの自由の主張にもかかわらず、今日では、研究者たちが陰に陽に有するキリスト教中心の宗教理解のゆえに、隠れた神学との側面を強くもったものとして批判されることが多い。宮嶋氏はそうした現代からの評価を十分に踏まえつつも、ハイラーの仕事を神学とは区別された宗教学の業績として読み、そこに肯定的に継承すべきものを読み取ろうとする。それは、ハイラーの仕事のどの部分にどのような神学性が潜在するかを抽出し、そこから反省して彼の宗教学を純化しようとする、という手順となっている。じっさい、第一章でハイラーの生涯と主たる業績が概観されるが、そこでは、カトリシズムとプロテスタンティズムの狭間にあつて普遍的「宗教」の理想のもとにキリスト教の両教派を、さらには世界の諸宗教の根本的統一を願っていた実践家としての側面が注目され、彼は大学教授として宗教学を研究した人物というより、「宗教学を生きていた」人として描かれる。第二章では、古今の諸宗教における祈りの現象を記述分類した大著『祈り』を精密に読み解き、祈りの集団性と個人性、言葉の即興性と定式化、また神秘主義的／預言者的、宗教の祈り／哲学者の祈り、といった分類の原理自体に潜在しているハイラー自身の神学的宗教観が取り出される。第三章では、ヒンドゥー教とシーク教からキリスト教に回心して二十世紀初頭のヨーロッパで話題をまいたサドゥー・スンダー・シングへのハイラーの評価に、彼の理想のキリスト教ないし宗教観を読み取る。こうしてハイラーの宗教研究に見られる潜在的キリスト教中心主義ないし神学性を冷静に見て取った上で、宮嶋氏は、ハイラーが工夫したさまざまな類型論を批判的視点から洗練することで現代的な宗教類型論形成の可能性を見いだしている。「補章」でなされる『一遍聖絵』に描かれた祈りの形態の分析はその実践であり、一定の成果を挙げている。ハイラーの著作群の精密な読解に集中するあまり、彼の仕事を当時の他の宗教理論や、神学、思想状況の中に位置づける作業が十分にはなされていないうらみがあるが、従来看過されてきた主著群の精密な読解に正面からとり組んで彼の宗教学的思考の核心に迫った意義は大きい。今後の宗教現象学派研究に不可欠の作業であり、新たな宗教類型論形成の可能性に開かれてもいる。よって、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものであると判断する。